

修士論文(要旨)

2010年1月

葛藤場面における二者間のコミュニケーション行動に関する実験的研究

指導 種市康太郎 准教授

国際学研究科
人間科学専攻 臨床心理学専修
208j5019
広野幸奈

【目次】

1.問題

- 1-(1).はじめに
- 1-(2).家族療法とシステム論
- 1-(3).ポジティブ・フィードバックとネガティブ・フィードバック
- 1-(4).家族療法におけるコミュニケーションの語用論的研究の文脈
- 1-(5).対人システムの自己制御性に関する研究-PIM(Problem-Interaction Model)理論-
- 1-(6).ディスクオリフィケーション(disqualification)反応に関する研究
- 1-(7).持続する関係におけるコミュニケーション
- 1-(8).感情の3つの様相とコミュニケーション
- 1-(9).目的・仮説

2.方法

- 2-(1).予備研究
- 2-(2).被験者
- 2-(3).実験場所
- 2-(4).使用道具
- 2-(5).質問紙
- 2-(6).実験手続き

3.会話分析

- 3-(1)言語コードのコーディング
- 3-(2).非言語行動のコーディング

4.結果

- 4-(1).話題の違いにおける重要度の変化について
- 4-(2).話題の違いにおける解決困難度の変化について
- 4-(3).話題の違いにおける日常生活での話しにくさの変化について
- 4-(4).話題の違いにおける PA の変化について
- 4-(5).話題の違いにおける NA の変化について
- 4-(6).相互作用レベルの検討
- 4-(7).非言語ディスクオリフィケーション反応の検討
- 4-(8).ディスクオリフィケーション反応と感情の関連

5.考察

- 5-(1).仮説 1 について
- 5-(2).仮説 2 について
- 5-(3).社会心理学領域への示唆
- 5-(4).実験の反省とこれからの展望

問題と目的

MRI(Mental Research Institute)短期・家族療法では、「今ここで」行われている家族の交流に見られる相互のコミュニケーションに焦点を当て、家族の行動を理解しようとする。家族に危機が訪れたとき、家族システムにおいては、自己制御性によってシステムを維持しようとする何らかのコミュニケーションが生じると考えられる。

コミュニケーションの「語用論」的研究の流れの中で、対人システムの自己防御性に関する研究が行われている。ここでいう対人システムの自己制御性とは、二者間の対人システムが遠心的働きになったときに、関係性の崩壊を防ごうと反作用する形で出現するコミュニケーション、すなわち、二者間の関係性を維持するために使用されるコミュニケーションである(若島・生田・長谷川,2000)。コミュニケーション研究の中で、自己制御機能について扱った研究は、葛藤場面を想定するものが多い。システム的な視点から見ると持続的關係が見込まれる関係において葛藤的場面は、そのシステムに遠心的働きを生じさせる、と仮定される。この対人システムの自己制御性に関する研究は、二者間が問題について話すことで生じる対人システムの遠心的動きに反作用で出現するコミュニケーションを捉える試みとして行われてきた(生田,1999;生田,2000;生田ら,1999)。

本研究では、持続する関係にある二者間のシステムを異性のカップルと定義し、遠心的動きの高まりと比例して受け手の反応がディスクオリフィケーションとなる過程を比較検討する。また、問題レベルによる非言語コミュニケーションを比較検討する。

II. 方法

<予備調査>

本実験における実験課題時に使用するリストを作成するために、質問紙調査を行った。本実験の実験課題時に話題がない場合の指標として使用する。

<本実験・質問紙>

質問紙は以下の項目で構成した。

- ①話し合われた話題の重要度の評定
- ②話し合われた話題の解決困難度を評定
- ③話し合われた話題の日常生活での話しにくさを評定
- ④統制課題、実験課題を経験した後の気分を調査するため、日本語版 PANAS (佐藤・安,2001) を使用した (下位尺度としてポジティブ気分尺度とネガティブ気分尺度の2尺度。以下、それぞれ PA、NA と略記)。

以上①～④について6件法で記入を求めた。

<本実験・実験手続き>

6組の持続する関係を見込むデートカップルを対象に、ビデオ撮影による実験調査と質問紙調査を行った。実験はカップル2人1組で行い、統制課題(旅行計画)と実験課題(二人の間で未解決の問題解決について)を7分間行った。各課題終了後に質問紙に回答を求めた。

<分析>

VTR に記録されたカップルの実験時における全ての会話トランスクリプトを作成し、会話分析を行った。

Ⅲ. 結果と考察

問題レベル、気分状態、非言語行動について繰り返しのある 2 要因の分散分析を行った。その結果、実験課題は、統制課題よりも、二者間で話し合うには問題レベルが高いと評価していた。また、女性は、男性よりも実験課題後に NA 感情を経験していた。非言語行動では、実験課題は統制課題よりもうなずきの回数は増加していた。

また、ディスクオリフィケーションと感情状態の関連を調べるため、相関分析を行った。その結果、統制課題において、NA と話題ジェスチャーの間に負の相関が認められた。つまり、Na が高い場合には話題ジェスチャーが少ないという傾向が認められた。また、問題レベルの解決困難度と沈黙の間に正の相関が認められ、解決困難度と話題ジェスチャーの間に負の相関が認められた。つまり、解決困難度が高いと評価されている場合には、沈黙が多く、話題ジェスチャーが少ないという傾向が認められた。

個人による問題レベルの評価と相互作用レベルとの間には有意な相関が認められ、問題レベルが高いと評価されるほど、相互作用レベルは低下し、対人システムは遠心的動きを示していた。つまり、個人差を考えず、課題レベルで比較すると差はないが、個人の評価と非言語的行動の表現との相関を調べると明確な結果が示された。

問題レベルの中でも、解決が困難であると個人が評価した際に、非言語的行動の話題ジェスチャーの出現が減少し、さらに沈黙する時間が増加するということが示された。対人システムが遠心的な方向に向かった際の、反作用として話題ジェスチャーは減少し、沈黙が増えることによって、直接的なコミュニケーションを避けていることが明確となり、曖昧なコミュニケーションによって関係性の維持を行っていると考えられる。

しかし、個人差を考えず、課題レベルで比較すると差は認められなかった。そのため、本実験の被験者は、関係維持が良好なカップルは円滑なコミュニケーションを行っているという先行研究で示唆されているように、関係性が良好であったために、曖昧なコミュニケーションの出現頻度に変化がなかったと考えられる。

【引用文献】

- Bateson,G.,Jackson,D.D.,Haley,J.&Weakland,J.H.(1956). Toward a theory of Schizophrenia. *Behavioral Science*, **1**,251-264.
- Bavelas,J.B.(1983). Situations that lead to disqualification. *Human Communication Research*,**8**,214-227.
- Bavelas,J.B.,Black,A.,Bryson,L.,&Mullett,J.(1988). Political equivocation : A situational explanation. *Journal of Language and Social Psychology*,**7**,137-145.
- Bavelas,J.B.,Black,A.,Chovil,N.,&Mullett,J.(1990). Truths,lies,and equivocations:the effects of conflicting goals on discourse. *Journal of Language and Social Psychology*,**9**,135-161.
- Bavelas,J.B.,&Chovil,N.(1986). How people disqualify: Experimental studies of spontaneous written disqualification. *Communication Monographs*,**53**,70-74.
- Bavelas,J.B. & Simth,B.J.(1982). A method for scaling verbal disqualification. *Human Communication Research*,**8**,214-227
- 生田倫子(1999).葛藤場面における笑顔表情の自己制御的機能について.カウンセリング研究,**32**,157-162.
- 生田倫子(2000).対人システムの自己制御的機能に関する研究.家族心理学研究,**14**,29-40.
- 生田倫子・若島孔文・長谷川啓三(1999). 笑顔の自己制御的機能について—笑顔と葛藤方略との関連性—. 家族心理学研究,**13**,115-122.
- 生田倫子・若島孔文・長谷川啓三(2000).対人システムにおける自己制御的機能に関する研究.家族心理学研究,**14**,29-40.
- 若島孔文(1997).非言語的マネージメントコミュニケーションと対話間の関係性の認識の影響—家族システムにおける第2次変化を求めて—.カウンセリング研究,**30**,227-233.
- 若島孔文(1998). ダブルバインド理論の再考—夫婦の葛藤場面における矛盾するメッセージの伝達とその反応—.日本心理学会第62回大会発表論文集,1020.
- 若島孔文(1999). ディスクオリフィケーションを予測する問題—相互作用モデルの提案—夫婦の葛藤的会話分析から—.家族療法研究,**16**,34.
- 若島孔文(2000). 葛藤的会話場面における「回避的コミュニケーション」の生起のメカニズムに関する研究—ディスクオリフィケーションが生起する状況の解明に向けて—.東北大学大学院教育学研究科平成12年度博士論文,(未刊行).
- 若島孔文(2002). ディスクオリフィケーションを予測する「問題-相互作用モデル」の提案—夫婦の葛藤的会話の分析から—.聖路加看護大学紀要,**29**,22-31.
- 若島孔文・生田倫子・長谷川啓三(1999). 葛藤的会話場面における脱文脈コミュニケーションの研究—問題—相互作用モデルの検証とその修正—家族療法研究,**16**,29-37.
- 若島孔文・生田倫子・長谷川啓三(2000). 葛藤場面に埋め込まれた矛盾するメッセージの伝達とディスクオリフィケーション—二重拘束理論の臨床心理学的研究—.カウンセリング研究,**33**,148-155.
- Weiner,N.(1948).Cybernetics, or control and communication in the animal and the < Machine. Cambridge, Massachusetts : Technology Press.